
崔仁浩原作映画における「死と再生」——1970年代～1980年代韓国映画に描かれた「鯨」の意味

朴志元 (関西学院大学)

1970年代～1980年代の韓国映画には「鯨」というテーマが繰り返し登場してきた。特にそれらは同時代の韓国を代表する小説家、崔仁浩(チェ・イノ、韓:최인호, 1945-2013)の小説を映画化した作品に登場する。崔の代表作であり、脚本も手がけた作品である『馬鹿たちの行進』(1975)と『鯨とり』(1984)では、主人公たちが「鯨をとる」という耳慣れない言葉を口にする。この「鯨とり」や「鯨」という言葉の持つ意味についてはしばしば議論的となってきた。

先行研究において、メルヴィルの『白鯨』と同様に本作では鯨が人間の闘争や抵抗の対象であるとしており、鯨に「抵抗」という意味を読み取っている。こうした意味付けは当時の韓国の軍事政権下にあって、検閲などによりその意味が弱められたことが指摘されている。(강,2018) また、この2作品と同じく鯨が登場する作品として『ピノキオ』(1940)が取り上げられている。いずれの作品においても「鯨」や「海」というモチーフは「母胎回帰」を意味し、そうした一種の逃避から主人公たちが脱することにより、彼らは成長して生まれ変わると解釈されている。(진,2013)

崔仁浩原作の2作品では「鯨」が表立ってスクリーンに登場することはなく、あくまでそれらは主人公の言葉を通して語られるに留まる。したがって、この「鯨」という語は視覚的にはなく、象徴的な意味を持つ一種のアレゴリーとして物語の中に組み込まれてきた。ゆえに、主たる先行研究では「鯨」について、いずれも原作小説に重きが置かれ、他作品との比較からその意味について考察がなされているのである。よってこれまで崔仁浩の作家性に注目した「鯨」についての解釈や、なぜ敢えて「鯨」をスクリーン内に描写しなかったのかという映像学的観点から本作が論じられることは非常に少なかった。

本発表では、崔仁浩が両作品において「鯨」を象徴的に登場させたのは、彼のキリスト教的な価値観の現れであることを指摘する。なぜなら崔は、韓国においてカトリックの主要な論客であることが広く知られていた作家であり、彼の作品の中にはキリスト教と結び付けられた作品が多く存在するからである。キリスト教における「鯨」は、ヨナ書における「巨大な魚」がよく知られており、ヨナが魚に吞まれ、吐き出されることによって、彼は死と復活を体現する。これはまさに両作品における主人公たちの「死と再生」の物語とリンクしているのだ。崔仁浩が作品内で描いた「鯨」について、キリスト教という観点から分析することによって、彼が描く「鯨」には「死と再生」というキリスト教的価値観が反映されているという新たな解釈を提示することができる。